

第9回

平日の 午後のコンサート。

5.30 (水) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Wed. May 30, 2018, 14:00

at Tokyo Opera City Concert Hall

〈バッティストーニが聞かせる〉

Mo. Battistoni's Sound

指揮とお話 アンドレア・バッティストーニ

Andrea Battistoni, conductor & speaker

※プロフィールはp5をご覧ください。

Please refer to p12 for the profile.

コンサートマスター 近藤 薫

Kaoru Kondo, concertmaster



オッフェンバック: 喜歌劇『天国と地獄』序曲 (約9分)

Offenbach: Operetta "Orpheus in the Underworld" Overture (ca. 9 min)

ヴォルフ=フェラーリ: 『マドンナの宝石』間奏曲 (約5分)

Wolf-Ferrari: Intermezzo from opera "The Jewels of the Madonna" (ca. 5 min)

ヴェルディ: 歌劇『シチリア島の夕べの祈り』序曲 (約9分)

Verdi: Overture from opera "Sicilian Vespers" (ca. 9 min)

— 休憩 (約15分) —

ベートーヴェン: 交響曲第5番『運命』 (約35分)

Beethoven: Symphony No. 5 (ca. 35 min)

- I. アレグロ・コン・ブリオ Allegro con brio
- II. アンダンテ・コン・モート Andante con moto
- III. アレグロ Allegro
- IV. アレグロ・プレスト Allegro - Presto

主催:公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan



プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

5/30

**どこかで聞いた、このメロディ。
バッティストーニの名曲アラカルト**

今シーズンの「平日の午後のコンサート」は、小品をまじえた名曲アラカルト。タイトルを、あるいはメロディを誰もが知るポピュラーな作品が続々登場します。スタートの今回は、東京フィルの首席指揮者バッティストーニが、オペラにまつわる管弦楽曲とクラシック音楽の代名詞『運命』を、存分に“聞かせ”ます。

前半は旋律美の宝庫。締めくくりの“フレンチ・カンカン”で知られる『天国と地獄』序曲は、そこに至るまでの音楽も美しさに溢れています。『マドンナの宝石』間奏曲は、古くからのファンには懐かしい“昭和のポピュラー曲”。最近あまり演奏されないのが、今回は貴重な機会です。バッティストーニ二十八番のヴェルディ作品『シチリア島の夕べの祈り』序曲は、流麗かつダイナミックな音楽。いずれもマエストロ一流の豊麗なカンタービレが耳を酔わせ、後半の『運命』では、生気に満ちたタクトが壮絶な高揚感を与えてくれます。

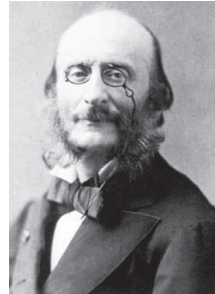
では、エキサイティングで陶酔的な午後のひとときを！



©上野隆文

天国地獄の神様が総出演。オッフェンバック『天国と地獄』

幕開けは、ドイツからパリに移って大成功を収めたジャック・オッフェンバック(1819-1880)の喜歌劇『天国と地獄』序曲。この喜歌劇(オペレッタ)は、財政難に陥った自らの劇場「ブーフ=パリジャン」の窮地を救うために書かれ、1858年に初演された彼の代表作です。全2幕の内容は、離婚寸前の夫婦が地獄で出会って現世に帰還しようとする物語=ギリシャ神話「オルフェオとエウリディーチェ」のパロディに、社会諷刺を加えたダタバタ劇。本来のタイトルは『地獄のオルフェ』で、邦題は明治末期~大正初期の上演時に付された意識です。



ジャック・オッフェンバック
(1819 - 1880)

有名なこの序曲、実はオッフェンバックの作ではなく、カール・ビンダーという人が、1860年のウィーン上演の際に、劇中の旋律を用いて編作したものの。しかし華やかで美しい内容と相まって、正式な序曲に等しい地位を得ています。曲は、快活な導入部に続いて、クラリネット、オーボエ、チェロ、(地獄の場の音楽を挟んで)ヴァイオリンの各ソロが、緩急の変化の中で登場。最後はカンカンと呼ばれる陽気なギャロップで盛り上がります。ちなみにこの部分は、本編でもフィナーレを飾る、天国と地獄の神様総出の乱痴気パーティーの音楽です。

5/30

恋に身を滅ぼした若者の物語 『マドンナの宝石』

おつぎは、近代イタリアの作曲家エルマンノ・ヴォルフ=フェラーリ(1876-1948)の歌劇『マドンナの宝石』間奏曲。ヴォルフ=フェラーリは、喜劇的なオペラを中心に多彩なジャンルの作品を残しましたが、現在では、唯一の悲劇である本作と『スザンナ



エルマンノ・ヴォルフ=フェラーリ(1876 - 1948)

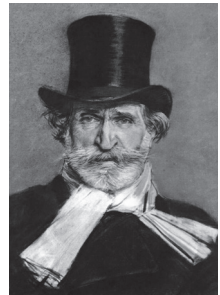
の秘密』序曲にのみ名をとどめています。

1911年に初演された『マドンナの宝石』(全3幕)は、義妹マリエラに恋心を抱く鍛冶屋の青年ジェナロが、彼女のために聖母の宝石を盗み出すも、マリエラは盗賊の首領のもとに走り、ジェナロは自殺する……といった陰惨な物語。今回演奏されるのは第2幕への間奏曲です。甘く感傷的なメロディがヴァイオリンで切々と歌われ、オーボエが活躍する中間部で曲調をチェンジ。その後、最初のメロディがより感情を込めて奏され、静かに終わります。

フランス語の台本で書かれた ヴェルディの労作『シチリア島の夕べの祈り』

前半最後は、イタリア・ロマン派オペラ最大の作曲家ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)の歌劇『シチリア島の夕べの祈り』序曲です。歌劇自体は、『椿姫』(1853)に次いで書かれた中期の作品。1855年のパリ万国博覧会のために、パリ・オペラ座の依頼で作曲され、同年当地で初演されました。そのためフランス語を用いた同国流のグランド・オペラ(4~5幕の長大な悲劇で、バレエも導入)の形で書かれています。全5幕の物語は、13世紀フランス支配下のシチリア島におけるイタリア人の反発をテーマにした、恋と戦いの悲劇です。

序曲は、短めの前奏曲が多いヴェルディ中期以降の作品の中では珍しくロングサイズのシンフォニックな音楽で、『運命の力』序曲と並ぶヴェルディの代表的な管弦楽作品となっています。曲は、主人公の一人エレナ公女のアリアを用いたラルゴの序奏から、アレグロ・アジタートの主部へ移り、戦いを表わす主題とチェロに出される抒情的な主題が交替しながら進行。プレスティッシモの激しいコーダに至ります。メロディアスな場面と劇的な場面の転換が聴きものです。



ジュゼッペ・ヴェルディ(1813-1901)。ジョヴァンニ・ボルディーニによる肖像画

『運命の動機』が繰り返されるベートーヴェンの傑作

後半は、ウィーン古典派の巨匠ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)の交響曲第5番『運命』。耳の不調を乗り越えて幾多の傑作が生み出された中期の代表作であり、インパクトのある出だしによってクラシック音楽の象徴ともなった劇的な交響曲です。主として1808年に、対照的な曲調の第6番『田園』と並行して作曲され、同年12月アン・デア・ウィーン劇場における自主演奏会で同時に初演されました。しかしこの公演は、寒い中で全8曲が4時間に亘って披露され、別の曲の演奏破綻もあって不成功に終わったと伝えられています。



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)。1803年の肖像

曲のポイントは、「ジャジャジャ・ジャーン」の4音=通称「運命動機」が全体の根幹となり、特に第1楽章がその動機の積み重ねによって作られている点。ちなみに『運命』のタイトルは、「『運命はこのようにして扉を叩く』とベートーヴェンが語った」という弟子シンドラーが伝える逸話に由来していますが、彼の伝える話は捏造が多く、これも信憑性は低いとされています。

ベートーヴェンは、9曲の交響曲ごとに新機軸を打ち出しましたが、本作はそれがとりわけ顕著。旋律ではなく短い動機を主軸にした発想と、その動機が全体に登場して曲を統一する有機的な構成のほか、闘争から勝利に至る“暗から明へ”の明確な構図、第3楽章の最後をクレッシェンドしたまま第4楽章に入る斬新な手法、交響曲史上初となるピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンの使用(すべて第4楽章のみ)など、独創性を満載した作品です。

第1楽章:アレグロ・コン・ブリオ。運命動機の連続によって緻密に構築されていく、緊迫感に充ちた楽章。第2主題は弦楽器で柔和に出される長調の旋律ですが、その背後にも運命動機が鳴っています。それだけに一瞬のオーボエ・ソロが強い印象を与えます。

第2楽章:アンダンテ・コン・モート。冒頭にヴィオラとチェロが奏するのびやかな第1主題、木管楽器が奏する上行形の第2主題に基づく自由な変奏

曲で、全体に第1主題が中心となります。運命動機は第2主題に内包され、低音弦楽器にも変化型で現れます。美しくも雄大な音楽で、安らぎと緊張感が同居しています。

第3楽章:アレグロ。いわゆる「スケルツォ」の楽章。冒頭の沸き出るような低音弦楽器の主題と、ホルンで出される運命動機を軸にした主部に、低弦が激しく動く中間部が挟まれます。最後の不気味な部分が徐々に盛り上がり、その頂点で第4楽章に入ります。

第4楽章:アレグロ。全合奏による輝かしい凱歌=第1主題で開始。滑るような第2主題をまじえながら、果てしなく高揚していきます。特にピッコロが清新な効果を付与。途中で第3楽章の回想を挟み、力強く華やかな終結に至ります。

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。